様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科研費 KAKENHI

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月　 ３ 日現在

機関番号：３２６４１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2010～2013
課題番号：２２５２０７５４

研究課題名（和文）「満洲国」におけるロシア人コサック社会の構造：農村部と中央組織の相互作用

研究課題名（英文）The Structure of Russian Cossack societies in "Manchukuo" period: interaction between central organizations and rural communities

研究代表者
伊賀上　菜穂（IGAUE, Naho）

中央大学・総合政策学部・准教授

研究者番号：１０３４６１４０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　3,300,000円、（間接経費）　990,000円

研究成果の概要（和文）：本研究ではロシア帝国で特殊な軍事身分を形成していたコサック（カザーク）住民が、日本の傀儡国家「満洲国」の統治下で築き上げた社会関係を調査した。特に注目したのは、コサック最大の集住地だった三河地方の農村社会である。当時の日本語メディアに表れる三河コサックのイメージ、ロシア語史料に記された日本人とコサックとの関係の分析から、日本人とコサックたちとの相互関係ならびに齟齬を、当時の権力関係に留意しながら解読した。また当時日本の研究機関が行ったコサック農業に関する研究報告書をロシア語に翻訳することで、関係者への情報の還元を実施するとともに、今後研究ネットワークを拡大していくための基盤を形成した。

研究成果の概要（英文）：In this project we conducted research on the structure of Russian Cossack societies in "Manchukuo", a puppet state established by Japan in northern China in 1930s, with a focus on the Trekhrech'e region (north of Hailar city), where several thousand Cossacks engaged in agriculture. We endeavored to clarify the history of interaction (and gaps) between Russian Cossacks and the Japanese under the power structure at the time, analyzing representations of Cossacks in Japanese publications, in comparison with such representations within Russian materials. We also aimed to share knowledge accumulated by Japanese organizations in those days, and to establish a platform for further international research cooperation. For this purpose, we translated one of the Japanese reports on large-scale surveys on Cossack villages in 1940s into Russian, and published it with interpretations.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・西洋史

キーワード：満洲（満州）　ロシア　コサック（カザーク）　移住　ディアスポラ　満蒙開拓　三河（さんが）　呼倫貝爾（ホロンバイル）

１．研究開始当初の背景

ロシア人ディアスポラの歴史研究は、ソ連崩壊後の政治的規制の緩和によって急速に進展している。20 世紀の複雑な国際関係の影響下にあった旧満洲ロシア人についても、ディアスポラ社会の適応・同化問題や、異文化混淆の問題がさかんに議論されるようになった。しかしこのような研究関心は、ハルビンなどの大都市が対象となる場合が多く、農村住民内部の相互関係や都市との交流については十分な研究が進んでいなかった。

研究代表者は平成 18～20 年度科学研究費補助金研究課題「旧満州農村のロシア人住民－日本人との接触とソ連邦への帰還－」（基盤研究（B）研究代表：阪本秀昭）に研究分担者として参加し、旧満洲のロシア人古儀式派教徒の村、ロマノフカ村に関する調査に従事すると同時に、ロシア帝国で特殊な軍事身分を形成していたコサック（カザーク）住民についても、予備調査を実施してきた。コサックは旧満洲においても一大勢力を形成してきたが、その多くは三河地方と呼ばれる旧満洲北西部（現・内蒙古自治区）に居住する農村住民であった。

この予備調査を通し、研究代表者は三河地方ロシア人およびコサック研究に関して日中露研究者の関心と情報に不均衡があることを確認した。すなわち日本では、「満洲国」時代に旧三河地方コサックに対する詳細な調査が実施されているが、第二次世界大戦後は元居住者による回想録と単発的な研究しか行われていない。一方ソ連崩壊後のロシアでは、第二次世界大戦後にソ連軍によって接収された白系露人事務局資料（ロシア語）を中心に研究が進んでいるが、日本語資料が利用されていないために、日本人とコサック住民との関係理解が不十分である。さらに中国の呼倫貝爾地域研究では、1990 年代から少数民族としての「オロス族」（ロシア系住民）に注目が集まっているものの、1950 年代までに中国を去ったコサック住民はその重要な研究対象となっていないのである。

「満洲問題」の当事者である日中露において情報の共有を進めていくためにも、まずは日本語資料の整理と分析、そしてロシア語資料との比較を急ぐ必要があった。

２．研究の目的

本研究課題の目的は、ロシア帝国で特殊な軍事身分を形成していたコサック住民が、日本の傀儡国家「満洲国」の統治下で築き上げた社会関係を分析することにより、農村地域におけるディアスポラ社会の特徴を究明することにあった。

1930～40 年代に存在した「満洲国」には、約 6 万人のロシア系住民（旧ロシア帝国領からの移住者）が居住していたが、コサックはそのうち 2～3 割を占めていた。またその半分以上は満洲国北部の国境地帯である三河地方（現中国・内蒙古自治区呼倫貝爾市）に住む農村住民であり、ハルビンなど東部の都市社会とは異なる社会条件下に置かれていた。

本研究では、旧満洲国に居住していたコサックのうち、農村住民である三河地方コサックに重点を置いて、その内部構成や外部社会との関係を親族関係、経済状態、政治・軍事組織、日本人との関係などから多面的に分析しようとした。

主要な課題は以下の 3 点である。

1．日本語資料から読み解く、日本人による旧満洲コサック表象の特徴。
2．旧満洲における三河地方コサック社会の実態。
3．第二次世界大戦後のコサック住民の運命（再移住地での状況）。

本研究では、これらの項目について調査し、またその結果を既に研究を進めてきた旧ロマノフカ村の状況と比較することによって、満洲における農村ロシア人社会の状況を解明しようとした。またその結果を踏まえ、ロシア系ディアスポラ研究全体の中で都市と農村の交流やその流動性、そしてディアスポラ社会全体の対権力関係の特徴を考察しようとした。

３．研究の方法

(1) 日本語資料の収集、分析、紹介

満洲国時代に作成された文献、映像、図像資料、および第二次世界大戦後に出された公文書や回想録、論文などを分析し、日本人と旧満洲コサックの関係、および日本人によるコサック表象の特徴を明らかにしようとした。

(2) ロシア語史料の収集と分析

ロシア語で書かれた関係史料を収集し、分析した。特に注目したのは、ロシアのハバロフスク地方国立文書館の白系露人事務局史料、およびプラハの国立図書館附属スラヴ図書館の亡命ロシア人史料である。この他、ロシア語刊行物やインターネットを利用して、三河コサックやロシア系移民に関するデータを収集した。

(3) 関係者や海外の研究者との情報交換

三河地方に居住していた人々へのインタビューを計画していたが、2011 年度以降は海外渡航が困難になったために、電子メールによる情報交換に切り替えて調査を進めた。

(4)日本の研究所による研究報告書の翻訳

「満洲国」時代に日本人が三河地方で行った研究内容を海外、特に当事者たちに紹介するために、『三河露人農家の農業経営調査報

告』（満鉄調査部、1943年）を翻訳した。

４．研究成果

(1) 三河地方に関する日本語資料の分析
①三河地方コサックに関する日本語刊行資料を収集し、その全体的傾向を把握することができた。結果の一部は2010年7月にストックホルムで開催された国際中東欧研究学会において、パネル「Cultural Heritage of Russian Émigrés in Asia」の中で口頭報告した（報告言語はロシア語）。また研究代表者が編集協力している雑誌『セーヴェル』（ハルビン・ウラジオストクを語る会）にも論文（資料一覧を含む）を掲載した。これらの結果を受けて、『満洲におけるロシア人の社会と生活』（阪本秀昭編著、ミネルヴァ書房）では、「日本人が描いたロマノフカ村－出会いと表象－」「日本人が見た三河コサック村－一九三〇年代～一九四五年」と題する論文を執筆した。その中では、日本人によるコサック社会の表象がロマノフカ村と比べて両義的であることを示し、その理由を彼らの軍事的身分と規模の大きさに求めた。

②『満洲の女たち』（生田美智子編著、大阪大学出版会）の共著者として、「表象としての農村ロシア人女性：日本人作家の眼を通して」と題する一章を執筆し、日本語小説におけるコサック女性の扱いとその表象の特徴について論じた（2014年度中に刊行の予定）。

(2) ロシア人研究者との研究協力
①『満洲におけるロシア人の社会と生活』（阪本秀昭編著、ミネルヴァ書房）の一部として、三河コサックおよびロマノフカ村に関するYu. アルグジャーエヴァの論文「旧住民が語る満洲古儀式派村の暮らし」「ロシア側資料に見る三河コサック村の生活」を和訳した。

②ロシアから古儀式派研究者のイヴァン・シェヴニン氏を招聘し、三河地方研究に関する情報交換を行うとともに、第5回東アジアスラヴユーラシア研究会議（2013年8月9～10日、大阪経済法科大学）に参加し、同氏が報告者となるパネル「Old Believers in Manchuria」の司会を担当した。シェヴニン氏は「1920～1930年代の満洲北部および中国における世俗権力の古儀式派教会に対する対応」と題する報告を行い、その中で三河地方コサックの中の古儀式派教徒に関する新しい史料を紹介した。

(3) 海外史料の分析

①主にブリヤート共和国文書館で収集した史料に基づき、『満洲の中のロシア』（生田美智子編著、成文社）の共著者として「ロシア正教古儀式派教会における本国と亡命者社会の連関－ソ連・旧『満洲』往復書簡より－」と題する論文を執筆した。この中で三河地方の古儀式派教区とハルビンおよびソ連国内の主教区との関係、およびオーストラリア移住後の教会問題の所在を明らかにした。

②プラハの国立図書館附属スラヴ図書館、およびロシアのハバロフスク地方国立文書館、同ハバロフスク地方図書館で、ロシア語資料の収集を実施した。文書館では同館保存の白系露人事務局資料を閲覧した。またスラヴ図書館では『極東のコサック』『東方の光』『協和会報』など、満洲国内外で発行された当時の雑誌や新聞から関連記事を収集した。ロシア語刊行物からは、日本語刊行資料にほとんど登場しないコサックの政治組織、および外国組織との関係について確認することができた。

(4) 海外への情報発信
①岡山大学大学院社会文化研究科博士後期課程学生エレーナ・ドミトリエヴァ氏とともに、『三河露人農家の農業経営調査報告』（満鉄調査部、1943年）の翻訳を行った。翻訳には研究代表者の解説を付与し、成果報告書として印刷・製本した上で、日本、ロシアなどの研究者と図書館に送付した。また研究代表者のホームページ上でpdfファイルを公開した。

②上述のICCEESでのパネル報告や、インターネット記事による研究紹介（“Encounter with Russians under Japanese Agricultural Colonization Policy in ‘Manchukuo’”, The Japan News, Yomiuri Shinbun）などを通して、満洲ロシア人農村社会研究に関する情報発信を行った。これにより海外の関係者や研究者から問い合わせを受け、研究情報の交換も行った。その過程で関係者へのインタビューの困難さ（個人情報へのアクセスの難しさ）も課題として浮かび上がってきたが、海外への情報発信の重要性も確認することができた。最終年度に完成させた『三河露人農家の農業経営調査報告』（満鉄調査部、1943年）の翻訳を公開したことにより、今後新たなネットワークが構築されると期待している。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　２件）

① <u>伊賀上菜穂</u>「アラスカの古儀式派教徒を訪ねて（上）（下）」『なろうど』ロシア・フォークロアの会会報、62-63号、2011年、11-18，21-28（単著、査読無し）

② <u>伊賀上菜穂</u>「日本人の三河コサックイメージ：1930年代～1945年の日本語資料の分析より」『セーヴェル』ハルビン・

ウラジオストクを語る会、第 27 号、2011 年、31-50（単著、査読有）。

〔学会発表〕（計　１件）

① IGAUE, Naho, Japanese Perspectives on Cossack Villages in the “Manchukuo” Period: Analysis of Published Materials in Japanese (panel “Cultural Heritage of Russian Émigrés in Asia”) (In Russian). ICCEES, Stockholm (30 July, 2010).

〔図書〕（計　４件）

① Н. Игауэ сост. Университет Тюо. Работа Отдела исследований экономики Северной Маньчжурии Южно-Маньчжурской железнодорожной акционерной компании (ЮМЖК). 《Доклад по исследованию форм ведения сельского хозяйства русскими крестьянами в Трехречье》. Опыт перевода. (Пер. на русс. Е. В. Дмитриевой). 2014.108.（伊賀上菜穂編・解説、中央大学（個人による印刷）『満鉄北満経済調査所調査「三河露人農家の農業経営調査報告」：翻訳試論』2014、108 頁。http://c-faculty.chuo-u.ac.jp/~igaue/Trekhrechieresearch1943.pdf）

② 阪本秀昭編著、ミネルヴァ書房、満洲におけるロシア人の社会と生活：日本人との接触と交流』2013（共著、95-128, 159-196）

③ 生田美智子編、成文社『満洲の中のロシア：境界の流動性と人的ネットワーク』2012（共著、237-266）

④ Faculty of Policy Studies, Chuo University, *Introducing the Faculty of Policy Studies: Integrating Policy and Culture*, 2010（共著、199-207）

〔その他〕

① Naho Igaue, “Encounter with Russians under Japanese Agricultural Colonization Policy in ‘Manchukuo’”, *The Japan News*, Yomiuri Shinbun, April 7th, 2011. (http://www.yomiuri.co.jp/adv/chuo/dy/research/20110407.htm))

② 伊賀上菜穂「日本の満蒙開拓政策とロシア人」『Chuo Online』読売新聞オンライン版、2011 年 3 月 24 日。（http://www.yomiuri.co.jp/adv/chuo/research/20110324.htm）

③ 伊賀上菜穂「国際中東欧研究学会（ICCEES）ストックホルム大会に参加して」『セーヴェル』第 27 号、ハルビン・ウラジオストクを語る会、2011 年 3 月、pp. 83-90(単著)。

６．研究組織

(1)研究代表者

伊賀上　菜穂（IGAUE, Naho）

中央大学・総合政策学部・准教授

研究者番号：10346140